

備前焼の歴史



日本のやきものの歴史は、約1万5千年前、九州地方で土器が焼かれ始めた縄文時代草創期にさかのびります。備前市内では1万有余年続いた縄文時代の真ん中頃、今から約4000年前の集落跡「長縄手遺跡（西片上）」が知られています。今から1450年ぐらい前、瀬戸内市で須恵器の生産が開始され、その後600年間約130基もの窯が築かれる中国地方最大の窯跡群「邑久古窯跡群」が形成されます。その終焉に対応するかのように伊部の地でやきものの生産が開始されました。この年表はその後の備前焼の雄飛を簡単にまとめたものです。

上段：備前焼の流れ

下段：備前焼に関連した歴史上のできごと

国内のできごと

近隣のできごと

備前焼のはじまり

伊部で窯が築かれた当初は白、灰色の製品が多く、須恵器のような製品が多く焼かれていた。

下山龍王山南東麓古窯

もこの時期にあたる。



備前焼が全国的な販路を形成
10数mだった窯の規模が20,30mと拡張していく
この時代には窯を大きくするため何度も窯床などを調整した痕を窯跡の発掘調査からみることができる。中には標高400mを超える場所へ窯が築かれることがある。
備前焼熊山古窯などもこの時期の窯である。

不老山東口窯が操業

播鉢などを大量に生産、推定全長40m×幅3.2m
この規模の窯では天井を支える柱（土柱）が確認された。



南・北・西の三大窯が成立

鎌倉～室町時代に、熊山・伊部・浦伊部の山中にあった多くの窯が、室町時代の後半になると山麓（平野近く）に降りてきて、少数の大型の窯を共有で使用するようになる。
室町時代～桃山時代ごろに三大窯（伊部南大窯・伊部西大窯・伊部北大窯）が成立した。

備前焼の類似窯

御細工人制度

この頃から塗り土（伊部手）が施される

天保3年、備前で初めて連房式登り窯が開窯され、リニューアルを繰り返しながら昭和15,16年頃まで使用される。
角徳利、人形徳利は瓶（福山市）の保命酒の容器として用いられた。
南、北の二大窯に築かれていた融通窯は、現在では北大窯にある窯のみ天保窯として市指定文化財となっている。



天保年間

昭和初期

備前焼の窯跡は、市内に100か所以上あり、28基の発掘が実施されています（2018現在）。これらの資料は大部分は備前市埋蔵文化財管理センターに収蔵されています。

レンガ製の登り窯が出現

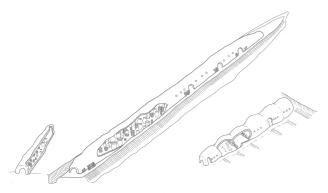


1200 1300 1400 1500 1600 1700 1800 1900 2000 平成

幹

出来事

榮西が宋よりお茶を持ち帰る



源頼朝鎌倉幕府を開く

鎌倉に大仏ができる

建武の新政

1299 一遍上人絵伝



「福岡市」（現在の瀬戸内市長船）の中に備前大甕らしいものが並んだ様子が描かれる。



大滝山三重塔建立

南北朝



応仁の乱

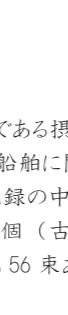
室町



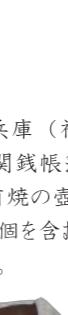
下剋上→戦国時代



兵庫北関入船納帳



1445



三石城が廃城



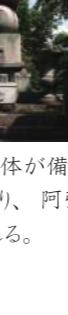
種子島に鉄砲伝来



本能寺の変



文禄・慶長の役



1598 豊國廟



1549 茶会記『津田宗及茶湯日記』



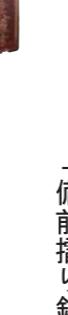
1587 松屋筆記



1686 閑谷焼窯



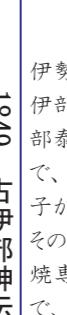
1686 金毘羅参り大流行



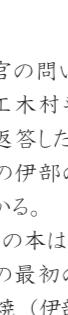
1849 古伊部神伝録



1956 国指定制度



1968 岡山県埋蔵文化財調査の嚆矢



1971 日本六古窯



1971 日本遺産



2017 中世の備前焼を再現



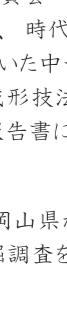
2016 中世の備前焼を再現



2017 日本遺産



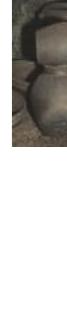
2017 日本遺産



2017 日本遺産



2017 日本遺産



2017 日本遺産



備前陶器窯跡

- 伊部南大窯跡
- 伊部西大窯跡
- 伊部北大窯跡
- 医王山窯跡

県指定史跡

- 閑谷焼窯跡

市指定史跡

- 下山龍王山南東麓古窯跡
- 備前焼熊山古窯跡
- 天保窯（建造物指定）



備前水指、建水がはじめて
茶会記にあらわれる。
以後、茶会記に頻出。



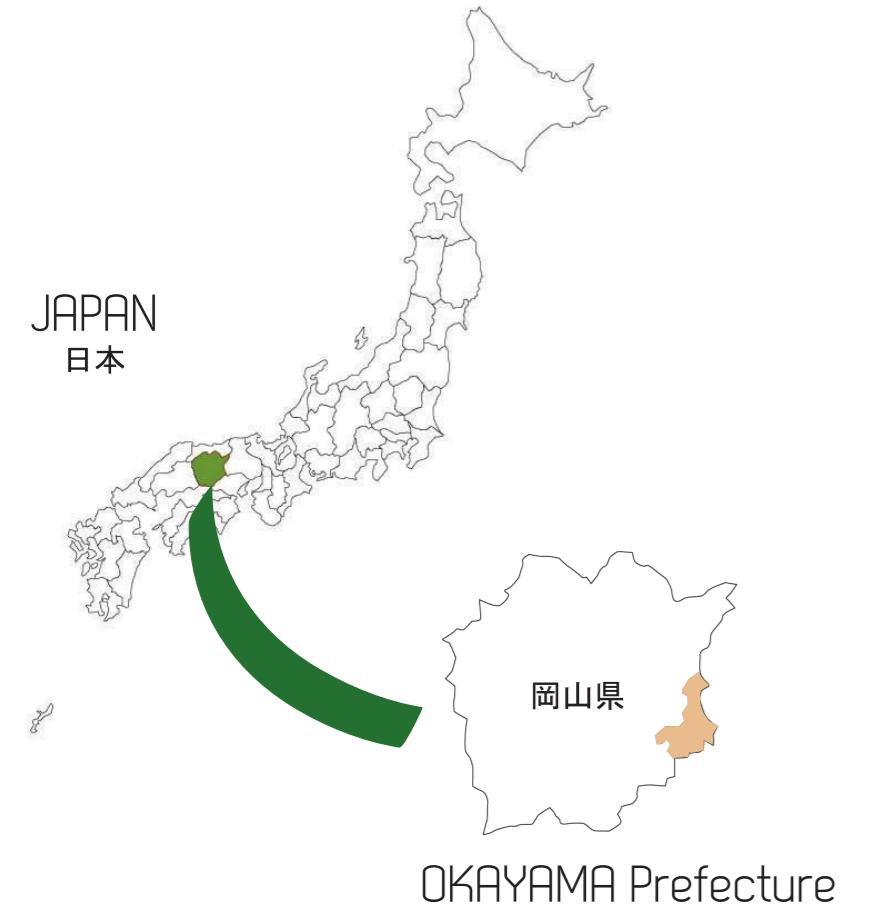
備前水指、建水がはじめて
茶会記にあらわれる。
以後、茶会記に頻出。



THE HISTORY OF BIZEN WARE

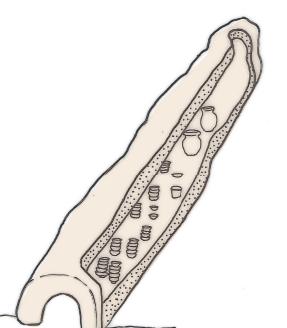
備前焼の歴史

BIZEN YAKI is fired in wood-burning kilns without glaze.



1 備前陶器窯跡（備前市伊部）国指定

江戸時代の備前焼を代表する史跡「伊部南大窯跡」、同時に成立して中心的な窯場になる「伊部西大窯跡」・「伊部北大窯跡」、これに平成30年2月12日より新たに平安時代から室町時代に至る10基の窯跡からなる「医王山窯跡」が加ったのが備前陶器窯跡。



備前市里海・里山ブランド推進協議会 with ICM
<https://www.satumi-satoyama.jp>



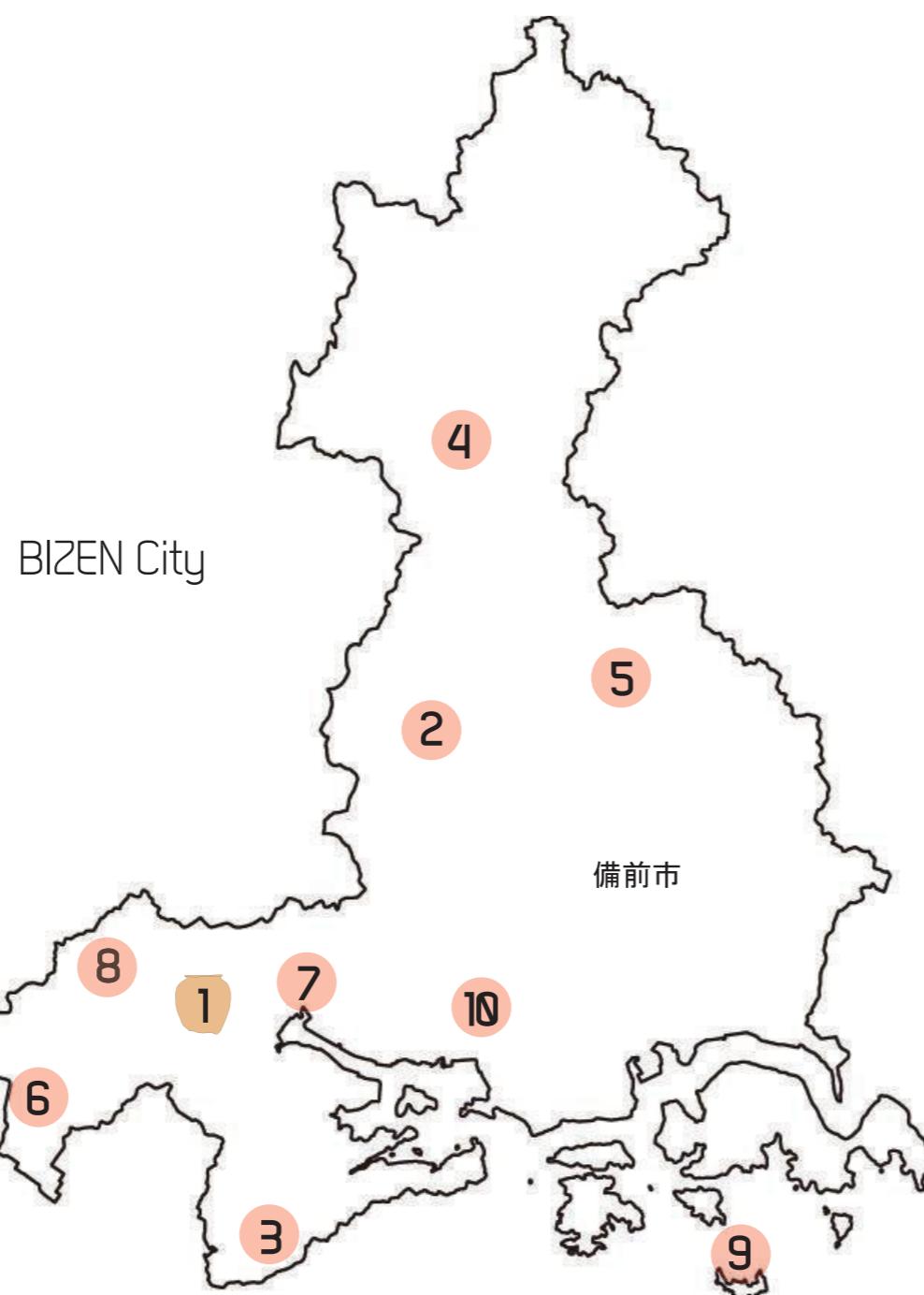
発行／備前市里海・里山ブランド推進協議会 with ICM まちを愛するものがたり部会
編集／平川忠、赤井夕希子、石井啓、備前市埋蔵文化財管理センター
発行日／平成30年3月

2 特別史跡 旧閑谷学校（備前市閑谷）国指定

寛文10年（1670）に岡山藩3代目藩主池田光政によって創建。
元禄14年（1701）には講堂や石塀も完成し、現在とほぼ同様の外観を持つ、堅固で壮麗な学校を完成させた。
2015年に「近世日本の教育遺産群」として日本遺産に認定される。

3 備前焼が誕生する直前の須恵器窯跡（備前市佐山）

邑久窯跡群は古墳時代～平安時代（6世紀後半～11世紀）まで営まれていた。瀬戸内市を中心とする窯跡群で、山沿いに移動しながら窯が築かれ、備前市佐山地区でも窯が築かれ、近年岡山理科大学によって8世紀、10世紀の窯の発掘調査が行われた。



4 岡山藩主池田家墓所 附 津田永忠墓（備前市吉永町和意谷）国指定

池田光政が一族の墓所として寛文7年（1667）津田永忠に造らせた莊厳な和意谷墓所。輝政（光政の祖父）のお墓にある亀の形に刻んだ石台・亀趺は高貴な人に用いられる。その亀趺をつくる際、伊部から五郎兵衛、五郎右衛門をよび、粘土で原型を成形、それをモデルに石工がつくったといわれている。池田家墓所はこの他、光政の息子綱政が造営した正覚谷墓所（岡山市円山）の2ヶ所にある。

5 三石城跡（備前市三石）

元弘3年（1333）、三石の地頭伊東大和二郎が南朝方の挙兵に呼応し、山陽道を塞ぐ目的で城郭を構えたのがはじまりとされ、室町時代には備前守護代の浦上氏が居城とした。城内では備前焼の大甕も多く使われていた（中世城郭で備前焼が出土する例は多い）。戦国時代の終わり頃、浦上村宗の子宗景が天神山城へ移り廃城となった。

6 備前焼「伊部手」の土（備前市畠田・磯上付近）

伊部手は塗り土という技法のひとつで、とも土（本体と同じ土）または備前市畠田付近で採れる粘土（鉄分が多く融点が低いのが特徴）を表面に塗り、焼成すると紫蘇色、黄褐色、黒褐色に発色する。寛永年間（1624～44）頃から盛んになった。この辺りの福田地区では瓦がつかれていた。

7 宇佐八幡宮備前焼狛犬（備前市西片上）市指定

阿形には「文政九丙戌年（1826）九月吉日 備前 釜元 森五兵衛尉 正統」、吽形には「伊部細工人 服部章兵尚芳 森五兵衛尉 正統」と刻まれている。像高約1.4m、胴周り約2.5m。江戸時代を代表する備前焼狛獅子で、最も大きいもののひとつ。

8 大滝山三重塔（備前市大内）国指定

方三間本瓦葺の三重塔で、塔頂に鋳鉄製の相輪（約6.1m）を立て、総高約19.7m。嘉吉元年（1441）に足利義教が建立したと伝えられる。この大滝山周辺の山中には南北朝時代前後の備前焼の窯も多く確認されている。

9 大多府漁港元禄防波堤（備前市日生町大多府）国指定

元禄11年（1698）、岡山藩主池田光政が津田永忠に命じて整備した波止。石を2段に積む曲面形状の直立式石積防波堤で、延長129.7m、幅6m、高さ5m。後世の補修は見られるが、現在まで残存する数少ない江戸時代の波止。江戸時代には岡山池田の番所が置かれ、西国大名などが、参勤交代の時に給水や風待ちの港として利用した。

10 井田跡（備前市穂浪）市指定

寛文6年（1666）に池田光政が津田永忠に命じ、寛文11年（1671）に上井田が完成。さらに貞享元年（1684）から元禄元年（1688年頃）にかけて下井田が造成された。この井田は、中国周時代（紀元前1100年頃）の収税方法とされる井田法を現実に再現した学校田で、宝永7年（1710）に下井で地検があり、「閑谷学校付キ」となると、その収穫が閑谷学校の運営にあてられた。このように実際の土地に具体的にあらわしたものではなく非常に貴重な史跡といえる。

